

兵庫県西宮市における少年野球メディカルチェック事業の実態と現場検診への移行

武庫川女子大学 健康科学研究会

松岡紗也香,相澤徹

武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科

野老稔,田中繁宏

西宮市医師会

杉本欣也,竹政順三郎

西宮市甲子園ロータリークラブ

尾川一郎

西宮市恵美寿ロータリークラブ

長部幸子

はじめに

わが国において野球は、幅広い年齢層で身近なスポーツとして親しまれている。阪神タイガースのホームグラウンド、そして高校野球の聖地といわれる甲子園球場を持つ兵庫県は、特に野球の盛んな地域である。華々しい舞台上で活躍する選手を間近に、夢や憧れを抱き、練習に取り組んでいる子供たち、そして多くの可能性を秘めた子供に夢を抱いている大人たちも多いと言える。

しかしながら、これから野球人として開花していくはずの子供たちが、信頼する大人の指導の下で傷害を被り、早くして野球への夢を諦めざるを得ない事態に陥る現実があることに目を伏せてはならない。

松浦は、少年野球で頻発する肘傷害は、骨軟骨障害が 92.4%、筋腱・靭帯付着部障害 7.6%と骨軟骨障害が圧倒的に多いと報告している。成長期に頻発する骨軟骨障害は、進行すると完全な修復は期待できず、野球への夢が絶た

れてしまうどころか、日常生活に支障を来たす可能性もある。しかしながら、投球時に痛みがあっても数日で消失するものが大半を占め、可動域制限も気付かない等、症状所見の乏しい事から早期に発見し難い。

また、岩瀬らによって、病院スポーツ外来で発見した半数以上が、根治的治療の望みの絶たれた進行期から終末期であるのに比べ、検診では 95.0%以上が初期段階で発見でき、治療を終えた例の 90.0%以上が完全修復を来したと報告されている。

以上より、傷害の疑われる子供を早期発見し、早期治療につなげ、健全な発育発達を促す為にも、メディカルチェックの実施が大きな成果を挙げると考える。そこで、西宮市甲子園・恵美寿両ロータリークラブを企画・運営の核として、武庫川学院健康・スポーツクリニックと西宮市医師会の協力の下、平成 16 年度より少年野球メディカルチェック事業を実施している。我々の2年間の活動結果を報告する。

対象及び方法

対象は、西宮市軟式少年野球連盟に所属する選手、平成16年度22チーム609名(10.25歳)、平成17年度22チーム607名(10.23歳)とした。

問診票を事前に配布・回収し、メディカルチェックが必要とされる選手をチーム毎にリストアップし、武庫川学院健康・スポーツクリニックにおいて一次検診を実施した。その結果、二次検診を要すると診断された選手には、保護者が希望する西宮市医師会所属の協力医療機関への診療情報提供書を交付し、精査・加療を促した。また、二次検診医にはFAXによる病状報告を依頼した。

結果及び考察

平成16年度は問診票配布部数22チーム609名に対して、12チーム91名分を回収し、一次検診受診者は55名(9.0%)であった。そのうち35名(63.6%)に二次検診を要すると医師が診断した。二次検診診療機関から病状報告のあった22名のうち、上腕骨小頭離断性骨軟骨炎(以下OCD)が2名(9.1%)、X線異常を認める内側型野球肘が18名(81.8%)に認められた。徳島県でのメディカルチェックの実施結果と比較しても、西宮市において、肘の傷害が頻発している現状が窺える。

表1 徳島県と西宮市の比較

	徳島県 (平成14年実施結果)	西宮市 (平成16年実施結果)
問診票配布数	2577名	609名
一次検診受診者	1093名 (1093/2577=42.4%)	55名 (55/609=9.0%)
要二次検診者	481名 (481/1093=44.0%)	35名 (35/55=63.6%)
二次検診受診者	126名 (126/481=26.2%)	22名 (22/35=62.9%)
上腕骨小頭離断性骨軟骨炎(OCD)	2名 (2/126=1.6%)	2名 (2/22=9.1%)
X線異常を認める内側型野球肘	57名 (57/126=45.2%)	18名 (18/22=81.8%)

平成17年度は問診票配布部数22チーム607名に対して、22チーム449名分を回収し、一次検診受診者は49名(8.1%)であった。そのうち、19名に二次検診を要すると診断した。

平成17年度のメディカルチェック実施に際して、問診票回収数が昨年度の12チーム91名(14.9%)を大きく上回る、22チーム449名(74.0%)が連盟主導で回収されたにも関わらず、一次検診受診者数がほぼ同数であった。これは、現場へのメディカルチェックの浸透、関心や意識の低さの表れであり、また、我々の実施方法の見直しが必要であると考えた。

一次検診受診率を徳島県の実施結果と比較すると、徳島県は平成14年度42.4%だったのに対し、西宮市は非常に低い。これは、医師らの啓発活動やメディカルチェックの実施年数、それに伴う指導者や保護者の意識・関心の違いに起因していると考えられる。また、徳島県が大会会場において一次検診を行っているのに対して、西宮市では検診者をクリニックに迎えて行っており、スポーツ現場とメディカルチェックというサポート事業の場が離隔した状態である事が受診率低迷の1つの原因と考えた。

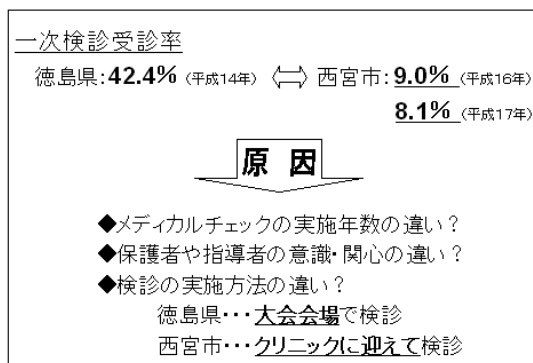


図1 一次検診受診率の低迷

そこで、現場への啓発、一次検診未受診者を中心とした検診をすべく、平成17年11月20日に行われた西宮市市長杯大会実施に際して、現場検診を行った。

現場検診の対象となったのは、平成17年度夏のメディカルチェックで要一次検診者とされながらも未受診であった198名。当日、一次検診を受診したのは44名で、そのうち9名を要二次検診者とした。2回にわたる平成17年度のメディカルチェックをまとめると、一次検診受診者は93名(15.3%)、要二次検診者は28名(30.1%)であり、一次検診受診率は未だ低いと言える。

現場検診をも試みたが、受診率が低迷しているのは、現場関係者のメディカルチェックへの意識・関心の低さが最も関係していると考えられ、スポーツ医科学に携わる人材が、積極的に子供たちのスポーツ活動現場や指導者・保護者に関わり、啓発活動を行う事が急務と言える。

今後の課題

子供たちは自身の身体が脆弱な成長段階である事を知る由もなく、大人たちの下で野球に取り組んでいる。現場指導者が身体に関する専門知識までも網羅するには限界があり、たと

え、医師やトレーナーなど個人がサポートに努めたとしても、広域に広がる傷害発生に歯止めをかけるには計り知れない労力や年数を要する事は言うまでもない。

今後の課題として、子供たちのスポーツ環境を取り巻く現状を明らかにし、地域一体となったスポーツサポートシステム構築への施策を検討する必要があると考える。

参考文献

- 1) 岩瀬毅信ほか: スポーツ少年団の整形外科的メディカルチェック 少年野球の野外検診より, 臨床スポーツ医学, Vol.13, No.10, 1081~1085, 1996-10
- 2) 松浦哲也: 子どもと少年野球, 子どもと発育発達, Vol.2, No.1, 23~26, 2004
- 3) 岩瀬毅信ほか: 少年野球肘の実態と内側骨軟骨障害, 整形外科MOOK, No.27, 61~82, 1983
- 4) 岩瀬毅信ほか: 上腕骨小頭骨軟骨障害, 整形外科MOOK, No.54, 26~44, 1988
- 5) 鳥居俊: 成長期のスポーツ障害の予防ー整形外科的メディカルチェックー, Japanese Journal of SPORTS SCIENCES, 第14巻, 405~412, 1995